
龍の棺 ~黒龍ノ棺~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の棺 ～黒龍ノ棺～

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

雨月

【あらすじ】

俺が爺ちゃんから龍がいるといつ話を聞いたのはずっと前の話。
そこで近日その龍とあつた。

(前書き)

この小説を読んで一箇所でも笑えるよつなどいらがあれば幸いです。
勿論、鼻で笑うのも笑つたことにカウントされますんでそのときは
感想なんかをよろしくお願ひします。

龍の棺 プロローグ

昔、俺の爺ちゃんが言つていたことなのだが龍には棺があるそうだ。

どういつた話か忘れてしまつたのだが、爺ちゃんはその龍の棺を持していたそうなのだが……記憶がちょっと曖昧なのだがその棺を所持していると人に姿を変えた龍が会いに来るといつていた気がする。

そのとき俺はまったく信じていなかつたのだが、爺ちゃんの目の前には龍が人の姿で現れたつて言つていた。爺ちゃんは俺にその龍の棺をやると約束してくれたのだが……その爺ちゃんがぽつくり逝つちまつて残された俺、つまり白河善人しらがわよしとへの遺書にはわしの屋敷にあるとだけ書かれていた。そして、俺はそれを探すために母方の父である爺ちゃんの家に向かつたのだ。

龍の棺 ↗ 黒龍ノ棺

俺が飛行機にバスに電車に徒歩……様々な公共機関に徒歩という原始的な移動手段を私用してやつてきた爺ちゃんの屋敷……それは比較的山の上のほうにあり、お隣さんが一キロ近く離れているような場所だつた。田舎ではなく、隔絶した感じだ……

「はあ……はあ……」

勿論、俺の体力は既に限界を超えており、朝五時半に家を出て今は昼間……どうやら今日中に自宅に戻るには無理そつた。

「ちょ、ちょっと休憩……」

家に着いても誰もいないようだつたので勝手にだだつ広い敷地内に入つて縁側を見つけてそこに寝転がる。

季節は夏で、蝉の鳴くうるさい音だけが鼓膜をふるわせる。無論、風鈴の音もどこからともなく聞こえてくるのだが、いかんせん、セ

ミたちが俺へのあてつけなのか知らないがその響く不協和音のほうが勢力が強く感じられた。さらに、じやりじやりと誰かが近づいてくる耳障りな音が俺を眠りの世界から遠ざけていたのだ。

「誰かの足音？」

頭の中で勝手に考えていたその言葉に気がついて、体を起こすとそこにいたのは俺と同じくらいと思われる女の子だった。その女の子は黒髪を腰の辺りまで伸ばしており、黒っぽいワンピースのよがなものを作っていた。つぶらな目に光る瞳は深遠の黒を湛えており、ぱつきゅっぽんな体型でもあつたのだ。それにたいして清楚な顔立ちなのがミスマッチながら俺の心に驚愕と至福のときを与えてくれたのだった。

「……」

「……」

その黒髪の女の子は物珍しそうに俺を見ており、俺はその神々しい姿に一つのおめめをしつかりと奪われていた。黙っている二人の間には誰も入ってくるものなんてなく、視界が交わることもない。聞こえてくるのは彼女が持っている風鈴がたまに吹く風に揺らされて心地よい音色を奏で、庭を過ぎたところにある森に存在するすべての雄蝉が鳴きやむことなくその不快な音を奏でていた。

「……」

「……」

あ～その、何だ……黙つていても埒が明かないと思つた俺は話しかけた……なんてこともせず、その場に寝転がつた。疲れていったので寝るだけだ……どうせ、こっちにすむ予定もないのにこのことお知り合いになつてももつ余つことはないだろう。そんなことを考えていたら急に眠気が襲つてきて俺は睡魔にかつことなく、ざわざわとけたアイスのようにその場で眠つてしまつたのだった。

鳴いていた蝉たちも疲れがピークに達したのか、他の種類の蝉たちにバトンとやる気を渡して静かになったようだ。俺が目を覚ます

と横には先ほどの女の子が寝ており、彼女が持つていた風鈴は俺の頭上につけられていた。

どのくらい眠っていたのかわからないが、この時期にしては結構遅いほうなのだろう、そろそろ夕焼けがその姿を消そうとしていたのだ。勿論、おなかも無駄に鳴るし、今手持ちで食べるものなんて持っていない。

「…………すっぴ～～…………」

女の子は隣で無防備に眠っているし、こうなつたら朝まで共にここで寝るというのもありなのかもしれないが…………やめておいた。そんなことより、何か腹の虫を鳴きやませる食べ物でも探すことにした。

爺ちゃんが死んで結構なるのでこの家の中に食べ物があることなんてないのは知っていた。ただ、爺ちゃんは蔵の中に梅干やらカンパンなどの保存食を残していたのは知っていたのでまだ後処理が決まっていないこの家の蔵の中にあるのは確かだ。爺ちゃんが死んでからこの蔵の鍵を持つてているのは俺だけだからな。

蔵のあるところに向かつて歩き出す。

あたりはもう真っ暗になつており、懐中電灯を持つてきましたことに安堵のため息を吐きながらおなかをさする。所有者を失つた庭は未だにその綺麗な庭を保つており、家の中も誰かが生活しているような綺麗さを保つていた。家というものは所有者がいなくなればあつといふ間に老朽化してしまうものだ。となると、もしかしたら先ほどの女の子がこの家に住んでいたのかもしれない。

「…………

五分ほど歩くと爺ちゃんの蔵がその田舎を俺の田の前に影となつて現ってくれた。この蔵の中に確かにあるものは爺ちゃんが集めた工口本に保存食といったところだろうか？あまり億のほうに行つたことはないでわからないのだが…………前者は誰かに燃やされてしまつたと爺ちゃんは言つてたな。

「…………」

蔵の鍵はさび付く」となく門にぶら下がつており、鍵に金がかけられていることは田に見えてわかつた。門も特注品だと俺に教えてくれてもいたし、蔵も結構な金額を掛けて建築したのだと教えてくれた。

「…………」

「つわつ……」

振り返るとそこには先ほどの女の子が立つていて。昼間見た綺麗な表情は今では懐中電灯に下から当てられて不気味な姿に豹変させていた。体はもとから黒い服を着ていたので闇とどりつかしてくるようにも見えた。しかし、まあ、光を当てればぱりきゅつぽんには代わりはないのだが……

「…………」

女の子は口を開けながら俺に話しかけているようなのだが、俺には理解できなかつた。言葉が通じていないと気がついたの

か、今度はジェスチャーで俺に何かを伝えよつとしている。人差し指を左手の親指と人差し指で作った穴につりこんだり出したりしている。こ、これは……

「それを俺にしろと？」

「おいらの声もあちらに届いていないようで相手は首をかしげている。どうやら、ジェスチャーで返答しなければいけないらしい。ゆ、指を穴につりこんで……出し入れってあんた……そりや、この

小説に規制をかけなきゃこかんせよ！

俺は相手を指差して……正確には下のほうを指差して……先ほど女の子が行つたジェスチャーをしてみた。

「…………？」

「あれ？違つのか…………」

嬉しいような、悲しいような……が、まあ、そりやいい。女の子はとりあえず俺に正しくジェスチャーが通じていないと気がついたようで、俺の手をとつて蔵のほうに歩き出した。そして、蔵

の前に立つと鍵を手にとつて俺に向ける。

「ああ……なるほど……鍵を開けて欲しかつたのか」
言われたとおりに鍵を開ける。

「ほら、開いたぞ」

「…………」

てつくり中に入りたかったかと思ったのだが、女の子は入るようなこともせずに俺を凝視している。俺を指差し、蔵の奥を指差す。

「俺？」

「…………」

俺は驚いて自分を指差すと、相手は頷いた。

ま、まあ、もとからこの蔵の中にはいることは決めていたことなのだが……なんだか気が殺がれてしまった。あたりは真っ暗、手にある懐中電灯は何かに力を奪われたのか……あつという間に消えてしまった。どうやら、事態はいい方向に傾いてはおらず、びつちかといつと悪い方向に向かっているらしい。

「…………」

「…………」

聞こえていたはずの蝉の声は既に聞こえてこない……ただ、ただ女の子の視線を感じるだけだった。

「わ、わかつた! いけばいいんだろ!」

どうせ通じないだろうが、俺はそんな大声を出して蔵の中に歩き出した。勿論、つかないとはいえ懐中電灯は手に持っている。蔵の中に入ると後ろで蔵の扉が閉められた上に鍵までかける音が聞こえてきた。そして、どこかに走つていく声が聞こえてきた。

「置き去りかよ!?」

戻つて扉を叩くつと思つたのだが、俺とあの子以外にここにないのだ。

家族には歸るのが遅くなるかもしれないと言っていたので戻つてこないのだ。

お隣さんに助けを求めるよりも一キロ以上離れているのだ。爺ちゃん

んが蔵の中に俺を閉じ込めたりしたときも外に声は届かなかつたこともあるのだが……そんな防音性抜群の蔵の中から叫んでも聞こえることはないだらう。まあ、トレイも風呂も食料もたくさんあるので生活に困る」とはないだらうが……ははは……

「ええい！笑つてないで何か脱出する方法を考えねば！」

俺はいい加減なれてきた暗闇の世界に記念すべき第一歩を踏み出した。

「んつがつ！－」

しかし、その記念すべき第一歩はなにやら硬いものに当たつて俺はこけてしまつた。

「あいたたた……」

こけたときの常套句を口にしながらも何とか立ち上がる。そして、俺を見事にこかしてくれた相手をまるでプリンに触れるかのように慎重に触る。

「硬い」

第一感想はそんなもので、着手点から徐々に触れていくとどうやらそれは四角い箱のようなものだつた。箱には蓋のような物がついており、それは……

「これが、これが棺か？」

それは見事に棺なのだが、おかしいことにそれは恐ろしげほど軽いものだつた。あるようなものでないようなものといったほうが多いのかもしれない。しかも、氷が水蒸気……つまり、固体が気体になるようにしてそれは姿を消したのだった。

「？」

このような奇怪な現象に一度も立ち会つたことのない俺としてはただただ、驚くしかなかつた。実際は殆ど視界が利かないところで起こつたことなのでいまいち実感がわかないのだ。実体験はしたのだが、一分も立たないうちにそれは幻なのでは？と頭の中で整理してしまうようなこととなつた。

『私の言つてのこと、わかる？』

鈴の鳴るような声が聞こえ、蔵の扉が開いて月光が入ってきた。

月光に照らされて先ほどの女の子の姿が幻想的だが、しつかりと俺の視界に入ってきた。黒髪は時折吹く夏の風に揺れて綺麗だった。

「日本語わかる？」

「え、ああ……」

「歩一歩、いかに歩いて俺にはじめて微笑みを見せてくれた。絶対に笑わないような表情を今までしていたのでちょっとしました。」

「え、ええと……あ、あんた名前は？」

「私？私は……名前はないよ」

「名前がない？」

俺がそう尋ねると

「そう、名前がないの」と言つて笑つた。

「何で？」

「…………名前なんて何であると悪い？」

「それは…………」

何でだらつか？ええと、やはり他と区別するためだら。

「他人と区別するためか？」

「それもあると思つけどね……ま、私たちの場合はちょっと違つんだよ」

違う…………何が違うのだらつか、そして、私たちとは…………どういう意味だ？複数形といつ」とはまだ他にいるような女の子が近くにいるのだろうか？

「と、とつあえず……私ね、龍なんだ」

「龍？……とこりで、名前の話はいいのか？」

「そう、龍……名前の話はあとでする」

龍とは龍とも書きドリ「龍」と呼ばれたりするものだ。その姿は猛獸や猛鳥の爪や翼をつけたような感じであり、多国の大神話や伝承に登場したりする存在である。俺個人の意見としては竜といわれると体がちよつと太めな感じを想像し、龍といわれると長細いものを想

像してしまつ。彼女が言つたのは龍のほうだろ。

「…………うつそだあ…………龍つていうのはそんな人の姿してるわけないだろ?」

目の前にいる女の子は初対面と言つていいほど面識のない人だ。そんな人から

「私は龍なの」といわれたつて誰か信じるつて言うんだ?龍の棺の話しもされたし、さつきも摩訶不思議な体験をした俺なのがさすがに視力までがおかしくなつちまつたわけではない。ここからは本当に個人的な意見なのだが目の前の女の子が人間じやなくて龍だというのなら信じないのだが妖艶な悪魔だと述べたならば信じていただろう。そして、その美しさに見事に撃沈していに違ひない。

「龍とか信じてない?」

「いや、信じてはいるけどさ、あんた人間だろ?」

人間とはサル目ヒト科の動物である。現存種は一種類しかいないそうだ。ちなみに、人間で辞書を引くとちょっと想像していたのとは違う結果が出たりするのでお手元に辞書を持っている人がいたら引いてみるといいだろう。

「それならさ、龍の棺つて話知つてる?」

「…………さ、さあ? 知らない」

龍の棺…………それは爺ちゃんから聞かされていた話だ。この土地にやつてきて結構思い出してきた。

その物語の始まりは……

「…………知らない? それなら教えてあげるね…………物語の始まりは…………」

その昔、一人のヒトがいた。

そのヒトは冒険者だつた。

冒険者と言つても、宝石なんかを探し回つているよつたヒトではなく、ただ単に見聞を広めるための冒険者だつた。

そしてある日、彼は一つの洞窟の中で夜をすごすことにした。

しかし、世もふけていたときに近くから獣の遠吠えが聞こえてきた。その時代、獣たちがいつぞヒトを襲おうかわからない時代で……そのヒトは洞窟の奥に姿を隠すこととしたのだ。そのようなことをしても鼻が良い獣たちに対抗できるとは思えなかつたのだが、獣たちはヒトに襲い掛かるようなことはなかつた。

洞窟の奥で一晩過ごうとするヒトの耳に声が聞こえたのだ。その声はとても苦しそうなもので、ヒトははじめのほうは恐怖していたのだがあまりにも可哀想だと思つて危険を顧みずに戸のするほうへと歩を進めた。暗くてよくわからないが、そこには何かがいた。それはヒトに頼んだそうだ…… そう、ただ一言

「私の棺になつて欲しい」と……

「つまり、その言つた存在が龍で、龍の棺つて……」

「そう、ヒト……つまり、そのヒトが龍の棺つてことになるんだよなつてこつた…… てつきりとつきの四角いものがその龍の棺かつて思つたんだけど…… そうじやないのか。

「それで、あんたが龍つて証拠は？」

「あ～やつぱり姿見せなきや駄目っ？」

「駄目。信じられないから」

「……わかつたよ。でも、この姿見ても絶対に私を嫌いにならないでね？」

嫌いになるも何も、今日ははじめてあつた人間に対して好き嫌いをぱつと決めるほど俺は短絡的な見方はしない。

「さあな」

「じゃ、見せない…… 約束してくれない人間には絶対にその姿見せないつて決めたんだもん」

「ああ、そうかい、それならかまわねえよ」

どうせ嘘なのだろう、この女の子は俺をからかっているのだ。あの爺ちゃんのことだ、あつちに逛つてもサプライズを俺に提供したかったのだろう。そう考えるとなんだか腹が立つてきた。

「…………でも、あの輝おじいさんのお孫さんなんだよね？龍の話聞いてなかつたの？」

「まあ聞いてたな、でも、爺ちゃんが本当にそういうのかどうかはわからんだろ？鵜呑みにするわけにもいかないんだけど……俺は見事に鵜呑みにしてた」

俺が正直にそのように伝えると相手は不思議そうな顔をしていた。

「あれ？じゃあ何で私が龍つてことを信じないの？」

「そりや、証拠を見せれば信じるけどな…………どうにもあなたのことを信じられん」

「え～なんで…！」

「この時勢、相手に隙を見ると向されるかわからないからな」「けど、私が隣で寝てても何もしなかったよね？輝おじいさんはすぐにも襲い掛かるつて言つてたよ？」

爺ちゃん、爺ちゃんは孫を何だと思つているんでしょうか？」返答いただけるのならいつか夢枕に立つてください。そのときはあなたから習つたすべてをかけて討ち果たしますから。

「あのなあ、俺はそんな奴、じやないの…」

「じゃ、私の話信じてくれるよね？」

「それとこれとは話しが別だろ？信じて欲しいのならさつと証拠を見せろ…」

「だ、だからそれは…………その、絶対に恐がらない…？」
「恐がる？何を？」

「私を」

「あなたを？」

「うん…………」

女の子はそのまま首を下にして右の人差し指で左手の人差し指をつついている。まったく話しが見えんし、それにいつまでたつても話しが平行線だ。このまま話し合ついたら朝を迎えるんじゃないのか？

「あ～もう、わかったよー見せてくれる代わりに俺があんたの言つ

「ことを一つだけ聞いてやる！」

俺は山あり谷ありの人生を送りたいと思っている男だ。人生とは万事塞翁が馬なのだと信じてやまないのだが……ある人は人生には谷などなく、そのままずっと上がつて死ぬときはその人生の山の崖から落ちて生涯を終えるそうだ。なんともまあ、酷な話である。おっと、話しがずれたな。

俺の答えに女の子はちょっと迷つたようだつた。

「本当？信じていいの？」

「さつき信じてくれないってぼやいてたのはどこでいつだ？信じてもらいたいのなら相手を信じるところからはじめることがセオリ一だ。その頭の中に刻み込んでおきな」

「うーん、そうなんだ」

ちなみに、相手を騙すこともここから始まる。いかにして相手と信頼しあえる仲になれるかということが他人を騙す第一歩なのだ。ああ、相手の信頼を早く得たい場合は相手の意見に賛同するばかりではなく、近くでその相手の行動などを観察して相手の思考をある程度読み取れるようになるとなおよい。

「金錢的と法律に触れるようなことじやななければなんでも言つこと聞いてやるぞ？何がいいんだ？」

「それなら……ええつと……」

首をかしげながらも女の子は必死に考えているようだつた。

「……名前が欲しい」

「名前？あんた、本当に名前が欲しいのか？」

「さつきも言つたとおり、名前、ないんだ。だからさ、私に名前をくれないかな？」

俺の手を握り締め、懇願してくるその表情に嘘偽りなんて汚い感情がないのが俺の目には綺麗に映つていた。この子はそんな感情とは無縁の存在なのかも知れない。

「名前か……」

「うん……とにかく、名前は？」

「俺？俺は白河善人だ。善人って呼んでくれ」

「わかつたよ……私の名前は善人の好きにしていいよ。提案しても私にこれがいいか？とか聞かないでね？希望を取るのも駄目だから」

つまり、どのよつな名前がいいのかとたずねることが禁止なら……本当に自分で考えなくてはいけないのか。

「あ～それなら……クロノってどうだ？」

「クロノ？」

「ああ、これなら漢字でも書けるからな」

ちなみに漢字で書くと黒之と書くことになる。なんとなく苗字のようなのだが、これなら国際時代の今でも充分違和感なく使われることだろ？

「クロノか……いい名前だね！」

「そ、そうか……そりやよかつた」

その場でぴょんぴょんはねているクロノに対し俺は心の中で謝つていた。

「すまん、クロノ……速攻で名前を考えるのなら“黒っぽいから”という理由だけで考へるしかなかつたんだ」

「ん？善人、何か言つた？」

「いや、何もいってねえよ……それよりさ、早く龍の姿を見せてくれないか？」

「ん……わかつた……」

「どことなく元気がなくなつており、先ほどとはかなり変わつた表情だった。それほどその龍の姿を俺に見せたくないのだろう……いや、正確に言うのなら

「おれにその姿を見られえて恐れられるのが恐い」ということなのだろう。先入観だけでの考へなのだがみたところクロノは俺と爺ちゃんぐらしか知り合いがないようにも見える。いや、見たことはあるのだろう、だつて誰かに恐れられるということは他人にその姿を見せた、もしくは見られたということなのだからな。

「じゃあさ、ちょっと田をつぶしてくれないかな？」

「わかった、田をつぶるわ」

俺は出来るだけクロノの要求にこたえることにした。龍の姿を見たとしても絶対にクロノのことを恐がらないと決めた。クロノっていうしょぼい名前をつけちまつたからな。これで罪滅ぼしつてわけでもないのだがクロノを傷つけたくないからな。

『いいよ』

「ん？」

頭に響くような感じでクロノの声が聞こえた。俺は素直に田を開けた。目を開ける瞬間には抱いていた不安はどこかになりを潜め、ただ、ただありのままを見ることにした。

「……」

そこにいたのは違ひのない黒龍。

その姿は威風堂々としており、その周りの風、俺に吹き付けて遠くの風鈴を鳴らしている大氣さえも威厳を感じるものだった。黒い鱗は黒光りしており、その姿は宙に浮いていて体はくねっていたりもしていたのによくわからないが十メートルは間違いなくあるだろう。角も生えており、一言で言つなら……

「すごいもんだ、これがクロノの本当の姿か？」

『ど、どうだろ……も、もういいかな？ 田、つぶつてくれない？』

言われたとおりに田をつぶつた。俺が田をつぶつている隙にもしかしたらそこらあたりの林から飛び出したりしているかもしけないし、実際のところはクロノではないかもしれないが……とりあえず、

龍は間違いなくいる！

ということだけはわかった。その姿は見事に力強く、幻想的であった。ああ、カメラでとっときやよかった。

『もういいよ』

「ああ、そうかい…………」

田を開ければそこには先ほどクロノがいて、物凄く心配しているような顔で俺を見てくる。

「ど、どうだつた？ やつぱり恐かつた？」

「そうだな、正直、震えた」

そういうとクロノはかなりうなだれていたようだつた。

「あんなにすこいもんとはな……感激しちまつて興奮しちまつた。クロノ、信じなくて悪かつたな」

「え？」

よくわからないといつた感じで俺を見てくる。

「恐かつたらその場でちびつてるか回れ右して蔵の中に閉じこもつてたぜ？だから、心配するな、俺はお前のあの姿を見ても別に恐いともなんとも思わん。だが、これだけは言つておく……俺が五歳ぐらいだつたら間違いなく泣いてたぜ？」

そんな感じでクロノに正直な感想を述べると彼女はきょとんとしていたのだが、嬉しそうな顔をしながらその黒い瞳からは大粒の涙を流し始めた。

「まったく、表情表現が忙しい奴だな？ 今度はどうした？ 田から鼻水がでてつぞ？」

「こ、これは嬉し涙だよ……ありがと」

そう言つて俺の右手を掴んできたクロノに対して俺が答えられる言葉は……

「…………あ、ああ…………」

無様なほどにそんな程度の言葉しか口から出てきてくれなかつた。まあ、場数を踏んだならば（もつ龍に会つことはないだらうが）もうちつとましめ回答をしてあげれただろ。優しく抱きしめることが出来たかもしれないが、初対面の相手にそのようなことをすれば俺は逮捕されるに違ひない。だから、これが一番いい反応なのかもしないな。そんなことを考えていた俺だから、過ちと言つ奴を犯すのだらう。思ったのだが、過ちつて何のためにあるんだ？ 犯すた

めか？

「これからよろしくね？」

「ああ、よろしく…………つてよろしくね？」

「うん、よろしく

よろしくって……夜露死苦つてやつつか、総長？あれ？何これ？
「龍の棺になつたんだから、これからは一緒にだよ？」

「いや、クロノ、一緒にあんた…………それどうこいつ意味？」

「一緒にここで生活するつてことだよ！善人、もしかして国語の
テスト苦手？」

いや、苦手じゃないぞ？むしろ、何もしなくても九十点ぐらいと
れてるから比較的得意なほうかもしないって…………はあ…？

混乱する俺、そして、気がつけば俺の両手を握つて二口二口して
いるクロノ……

「じゃ、改めてこれからよろしくね？」

じつせり、世界とここのは俺の都合よくまわつてくれるところこ
とは殆どないよつだ。

龍の棺 ～黒龍ノ棺～ 終

(後書き)

どうだったでしょうか？連載小説も書いてますが少々右腕なんかが動かなくなっているのでしばらくは小説かけないような気がします。じゃ、どうやってこうしたんだと問われると左腕で一生懸命がんばっています。誰もしないしてくれてないでしょ？がちなみに、雨月は左利きなので日常生活には困ってません。ご安心下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6257d/>

龍の棺～黒龍ノ棺～

2010年10月8日15時53分発行